

じいちゃんとさわがに

雨和七瀬

生活リズムが崩れ切った夏休みのある日の眠れぬ熱帯夜、十年前に死んだじいちゃんが枕元に現れた。それまで寝返りを繰り返していた身体は、金縛りなのか分からないが力が抜けきり、動けなくなっていた。

「久しぶりだなあ、麻美。お盆だから会いに来たぞ」

そういえばお盆か、などと考えながら、久々に聞いたじいちゃんの声に目頭が熱くなった。目の前で胡坐をかいているじいちゃんは、匂いも体温も感じない手で私の頭を撫でた。

「元氣だとは聞いていたけど、こんなに立派になったんだねえ」

じいちゃん、私背はそんな大きくなってないけど。

「いやあ、引つ込み思案だった麻美がアイドルになる夢を叶えたって聞いたときは驚いたなあ」

「えっちよっと待ってそれどこ情報？」

あ、声出た。しかも起き上がった。

「おお、あさみい、起きてたのか！ でもなあ、じいちゃんには麻美の声が聞こえないからお話はできなんだ」
それを聞いて私はスマホのメモアプリを起動した。

「ああ、お前の父ちゃんと母ちゃんにも会いに行くからそろそろ行かんとな」

「そんな、待って！ 私、アイドルじゃなくて……」

段々透明になっていくじいちゃんに手を伸ばす。でも効果は無く、手は空を切るのみだ。

「山に居たさわがにに麻美のこと聞いたおかげで、家を離れた麻美にも会えて良かったなあ。天国で見る紅白、楽しみに待つとるよ」

そしてじいちゃんは消えてしまった。

「Vチューバーだからそうそう紅白には出れないんだよ、じいちゃん……」

朝に起きるなんて久しぶりだ。怒りの起床といった感じだ。

「とりあえず、誤情報を流してるさわがには素揚げにしてやる……」

「山のさわがに」には心当たりがある。じいちゃんが飼っていたさわがにを、じいちゃんが死んだときに元居た裏山に放したのだ。そいつらがなぜ私のことを良く知っているのかは分からないが、ばあちゃんに会いに行くついでに探そう。

ばあちゃんに連絡すると、快く迎えてくれることになったので、早速向かった。お盆の時期は元々実家の方に

行くつもりだったので、もともとお休みをもらっていて本当に良かった。

「こんな遠くまで遊びに来てくれて嬉しいよ、麻美ちゃん」

ばあちゃんは私の手を取りにぎにぎとして、にこりと笑った。料理も家庭菜園もなんでもやるばあちゃんの手は、まるで柔軟剤を入れずに洗ったタオルみたいで、包んでくれる時の心強さを感じて私は好きだ。

荷物を寝室に置いて戻ってくると、ばあちゃんは昼ご飯を待っていていたみたいで、冷蔵庫からタッパーに入れたおかずを次々と取り出して、皿に盛りつけていく。

「私もやるよ」

「長旅で疲れたでしょ、お手伝いは晩ご飯のときにしてもらおうかな」

そんなこと言いつつ、ばあちゃんはあつという間に豪華な配膳が終えていた。

「じゃあ頂きましょう。このあと色々を見て回るなら、早く食べちゃお」

言われるままに席に着く。相変わらず、私のためにじいちゃんが使っていた夫婦箸の青い方を置いてくれる。

「……いただきます」

自分には少し長い箸で梅干しをつまみ、キラキラとしている白米に乗せる。ほくほくとした湯気に梅干しの酸っぱい匂いが合わさり、食欲が増していく。梅干しをつぶし、一口分を混ぜて口に入れる。甘酸っぱい口をもちよもちよと動かしているとお腹が鳴り出した。恥ずかしくなって他のおかずには箸を伸ばさず。小さめの揚げ物を掴み、口に放り込む。サクサク、パリパリとしておいしい。海老の殻だけの揚げ物みたいだ。さつと振ってある塩が効いていておいしい。

「ばあちゃん、揚げ物美味しいね」

「それならよかった。たまに作るのよ、さわがにの素揚げ」

もぐもぐとしていた口が止まる。それ私が成敗しようとしたさわがにでは。

とりあえず口に入れてしまったのはしっかりと噛んで飲み込み、ばあちゃんに確認を取る。

「その山のさわがに？」

「そうそう、だいぶ増えてたもんだから」

どうしよう。私が素揚げにしてやろうとしていた奴らが、既にばあちゃんの手にかかけられていたんだなんて。

「さわがに、まだ居るんだ」

「そうね、まだたーくさん居たよ。見に行く？」

私は頷きながらまたさわがにを掴んだ。

食事を終えて、裏山に向かった。まだ大学生だったのに体力が落ちに落ちて、沢にたどり着くまででペットボトルのジュースを飲み切ってしまった。

さわがにがたくさん、苔をむしっている。

「おお……」

久々に純粹な自然に触れたからか、感嘆の声が漏れる。でもこいつら、でたらめな事を吹聴している、ネット民の敵である。

「あのさ、じいちゃんに変なこと言ったの、君たち？」

すると、さわがにの手……ハサミが止まった。周りの仲間たちときよろきよろし合い、そそくさと逃げ出す。

「あっ、待て！」

逃げ出したさわがにの最後尾の奴を掴もうとすると、近くに大きめのさわがにがヌツと出てきて、私を押さえるようにハサミでちょん、と触れてきた。

「そやつは関わっておらん」

……喋った。いや、じいちゃんが言ってたんだから、

何らかの意思疎通の手段があるのは分かってたけども。

「そやつらはじいさんを知らぬ代の子らである」

なんだか尊大な態度に、手をそつと戻す。

「じゃあ君はじいちゃんを知ってる？」

「おぬしの事も含め、知っておる」

えー、私さわがにに一方的に認知されてるー。怖……。

「しかし、じいさんと話せるさわがには、ここには居ない。なぜならこの世に下りた死者に声を届けられる生者は居ないからだ」

「……確かに」

じいちゃんもそんなことを言っていた。私の声は聞こえない、みたいな事。

「……おぬしが『あいどる』なるものを目指している、と、幽霊になったじいさんから聞いた」

覚えがない。多分幼稚園生くらいの頃の話だろう。歌

が上手いと褒められて調子に乗ってた頃の……。

「じいさんはずっと気にしていたようで、私の同胞の幽霊と共に、盆になる度に見て回っていたようだ。何かさわがにがじいさんに吹き込んだというなら、我らではなく幽霊のことだろう」

「さわがにも幽霊になるんだ……まあ今なら納得がいくけど」

「おぬしもさわがにだ。いずれさわがにの幽霊に会うことになるだろう」

は？

「……は？」

「いや、すまぬ。これは我らの信ずるものの考え方だ。

おぬしもじいさんと同じく、さわがにを食し、肉体を構成する一部にさわがにがある以上、さわがにの社会と縁

がある。さわがにと対話ができるようになる程の縁だ、死した後もさわがにと共にあるだろう」

宗教的な割には随分と緩いお仲間判定である。

「仲間なの？ さわがに食ったのに」

「生きとし生けるものとは、そういうものだろう」

食われる側の言うことは一味違う。地雷どもに爪垢煎じて飲ましてやりたいよ。

「あいどる、ではないのか」

「ちよつと違うものになった。歌ったり踊ったりどころか、みんなの前で話すこともままならなかった私になったのは、マイクに向かって喋りながらゲームするだけの存在。歌は『歌ってみた』だけ。紅白には一生出ないだろうね。じいちゃんに期待させちゃって、なんだか申し訳ないな……」

さわがには手のひらの上で聞いていてくれたが、パッとこちらを向く。

『『コウハク』とやら、おぬしは出たいのか？』

「……別に。私の表現の仕方に合つてとは思わないし」

「なら気にせずとも良いのでは？ 去年見たじいさんは

『麻美が夢を叶えた』と言って、とても幸せそうにしていた」

去年から勘違いが発生していたのか。根深い問題だな。

日が暮れる前にさわがにと別れを告げ、ばあちゃんちに戻った。晩ご飯には冷しやぶが用意されていた。

「豚の幽霊にも会うことになるのかなあ」

「……？ どうだろうねえ。人だけ幽霊になるってのも変な話だものね」

ばあちゃんは、じいちゃんの幽霊が会いに来たという話をあっさりとして信じてくれた。ばあちゃんは見たことないが、父さんも「見た」と言ったことがあるらしい。

「……どうすればじいちゃんに『紅白には出ない』って伝えられるかな」

「うーん、声は聞こえないらしいからね、紙に書いておくとかくらいしか思いつかんねえ」

こんな話に真面目に付き合ってくれるのはありがたい限りだ。

「でも、紅白に出なかるうが何だろうが、じいちゃんに頑張ってる姿、楽しんでる姿を見せられたら良いねえ」

「……それだ！」

私は残つてたご飯をかき込むと手を合わせ、横に置いていたスマホで動画を作り始める。一分未満の動画、しかも文字だけでいいならすぐ作れる！

『じいちゃんへ テレビの紅白じゃなくて 年末企画配信見て』

これを共有する手段も選んでられない、チャンネルでアップしちゃえ！で、リンクをメモして……。

手書きのメモ用紙を、寢室の仏壇に供えてある盛り飯の上に刺した。気付いてくれ……！

年末企画『紅に染めてやる歌枠』配信。告知の段階では名前がスベリにスベったけど、じいちゃんのためだ、朝型の民、今日だけは許してくれ……。

「夜だけどおはよー、あさみんですー。紅白に喧嘩売るためにぶっ続けて歌うよー」

『あさみんの歌聞き放題!』『キターーーーーー』『あの怪文書ショートから四か月か……』

年末、暇なリスナーが聴きに来てくれている。リクエストと一緒に投げ銭も少し入っているが、今日はそれは関係ない。

「まずは昭和の歌謡曲からいきまーす」

普段あさみんボイスで出さない声の使い方しないと、なかなかいい感じに歌えない。いいや、地声で歌おう。

『うmmmmつま』あさみんこんなしっとり声出るんだ』

じいちゃんがゲーム機のカラオケでいつも歌っていた曲だ。アイドルの曲歌ってはばあちゃんに「浮気者ー」とか言われてたなあ。

『なつかしいうただ』と、初期アイコンのリスナーから高額の投げ銭が来た。

『見たことない人が凄い額投げてて草』こいつじいちゃんじゃね?』

歌い終わって、コメント欄を見返す。投げ銭を送ってきたのは……『さわがにじい』。じいちゃんが、天国から……?

『さわがにじい』さん、ありがとう。世代の人かな?』

『われではなくじいさんがうたってた』

……その口調、どうやってあの山のさわがにが投げ銭してんだ。

『じいさんとわれからのおとしだまだ』

……? どういうことだろうと、コメント欄を見つめる。

『たのしそうでなにより さすが、うたがじょうず』

『われは、じいさんと、ふるきさわがにとともにある』

「……そっか。歌、褒めてくれてありがとう」

『癖強くて草』『期待の新人』『さわがにじい、覚えておこう』

「……じゃあ次の曲歌いまーす」

そして、じいちゃんとさわがにのために、今年映画で有名になった追悼歌を歌った。朝型の民には気付かれないうように、涙は流しっぱなしのまま。